

国語は、抜き出しや解答が一つに限定される場合を除き、記述式の解答については採点基準に近い形の出題意図を示す。

1

問（一）

語るべきことがあって、それが語られている相手や状況において、その言葉の言外の意味を示すもの（四五字）

問（二）

「ただひとつの世界」では、現実の世界とは異なって、数多くの〈わたし〉の存在が意識されておらず、ひとつのファンタジーに完結していることを説明できていること。

問（三）

現実を「ともに」生きると、親ないし他人は幼児に対してどのような行動をとるのか。またその行動は、幼児にどのような恐ろしい認識をもたらすことになるのか。この2点を踏まえて説明できていること。

問（四）

筆者が、自分自身の行動と他者の言動の両面から、「自我の本質として、意志をもつ」という考えに対して反論していることを的確に把握していること。

問（五）

デカルトの主張する自我と筆者の主張する自我のありかたの違いを理解し、自我は社会において言葉を介した他者との出会いから生じるという筆者の考えについて、本文の一部を抜き出すのではなく、自分の言葉で「整理してまとめ」ていること。

問（六）

本問は課題作文に当たる。文章・構成面では、字数が8割以上あり、途中書きかけでないこと、誤字脱字がなく、全体の構成がきちんと構築されていることを求めている。内容面では、本文の内容を踏まえていること、自分自身の経験が述べられていること、その経験が指示されている内容にふさわしいこと、論旨が一貫し、結論まできちんと書かれていることを求めている。

問（七） a 課 b 浸 c 万能 d 地獄 e 源泉（原泉）

2

問（一）（解答例）

（1）人徳のある人が、世間で自分を慕うのを煩わしく思い、

（2）もともと私は誰の害にもならず、誰に役立つわけでもない人間なので、特に人に嫌がられた身だとも思われない。

問（二）（解答例）

大事な公務をさえ退いたのだから、つまらぬ私的な交際などのために出歩くことがどうしてあるだろうか、あるはずがない。

問（三）

せっかく隠居したのに、来訪客の相手や謝礼の挨拶などで、かえって俗世の付き合いが増えてしまうことの皮肉さが、わかりやすく説明されていること。

問（四）

（a）エ （b）イ （c）ア

問(一) (a) 「けだ」シ (b) 「あやま」チ

問(二) 客有<sub>下</sub>言<sub>二</sub>之於鄭子陽<sub>一</sub>者<sub>上</sub>

問(三) 君主様は(すぐれた)士を好まないということになりませんか

問(四) かんをしてこれにあわ(ぞく・しよく)をおくらしむ

問(五) 鄭の子陽は自分の目で確かめず、他人の言葉で人を判断する人物なので、良い時にはよいが、悪くすれば人の言で罪に陥ることになり、そのような人とは関わり合いをもちたくないから